



尚は、尙ショウで、八(分ける、開く)と向との会意形声字です。向は、家の窓の象形で、尙は、“窓をあけはなつ”ことを表わした字です。“日光や新鮮な空気が家には

いることを願う”という意味で、“希望する”のが本義の字です。また音が上ショウと同じなので、“うえ”という意味、また転じて、“尊ぶ”意味にも使われます。尚武。尚古(古い物をたっとぶ)。

賞は、上の意味の尙と貝とで、“ほうびとして上の人からたまわる財貨”という意味を表わした会意形声字です。今の“賞与”“賞金”にあたる字です。転じて“ほめる”という意味に使われます。音は尙です。賞賛。賞嘆。鑑賞。

償は、“賞はその人の労苦に対する代価であり、つぐないである”という意味で、賞と人亻とで、代価“つぐない”の意味を表わした字です。代償。弁償。償却。

裳は、上ショウの意味の尙と衣との会意形声字です。衣は今のブラウスで、それを着て、その上にはくのがスカートです。“上にはく”という意味で、スカートを表わしたのが裳です。衣と裳とで一組になりますので、衣類のことを「衣裳」と言うのです。古くわが国では、

裳を“も”と呼びましたが、衣と裳と続いているワンピースの場合は“すそ”の意味に使いました。音は尙ショウ。

常は、布の意味の巾と尙との会意形声字で本義は、「裳」と同じ、スカートのことです。元来、スカートは、布を腰に巻きつけるだけで、簡単な衣類ですから、昔は婦人の普段着として“つねに”用いられたものです。それで、“つね日ごろ”の“つね”の意味が生まれ、裳と常と用法が違ってきたのです。“いつも”常時。常勝。常用。“普通”常識。平常。音は尙ショウが濁ってジョウになりました。

掌は、手の上に物をのせる時に使う“手のひら”“だなごころ”のことです。手と、上ショウの意味の尙とで表わした会意形声字です。「掌握」は、“手のうちにある”→“自分の物とする”意味に使われます。“手を使う”ことから転じて“仕事をする”意味にも使います。分掌(分かれて仕事する)。職掌。車掌(車の仕事)。

堂は、上の意味の尙と土との会意形声字です。土を高く盛って、その上に建てた“りっぱな建物”という意味を表わした字です。尙の向は元来、建物の象形ですから、その方からも、盛り土の上の建物の意味に取れます。

寺院の本堂。講堂。殿堂。公会堂。また、“りっぱな”意味で「威

風堂々」などとも使います。音は尚^{ショウ}がなまってドウ。

瞠は、りっぱな建物に驚いて、“目を見はる”という意味の字です。瞠

目。瞠若。音は堂^{ドウ}です。

党は、人の意味の儿と尚との、会意形声字です。この字の本字は儻

です。古書に、「五家を比、五比を閭、五閭を族、五族を党とい

う」とありますので、かなり大きな聚落の称です。今は単に“人の

集まり”“仲間”という意味に使われています。政党。徒党。